

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	平賀正子 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同 の別	個人
研究課題	英文法参考書への認知的アプローチの研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 修士課程2年	鈴木希明 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2003 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

この研究は、〈形式〉や〈分類〉で英文法を覚えさせようとする従来の学校英文法に代わる、学習者が納得できる新しい学校英文法を作り上げようとするものである。その方法として、言語を人間の身体的な経験に基づく認知によって動機付けられたものであるとする認知言語学の考え方を取り入れ、実際に英文法参考書を制作することによって、学校英文法への認知的アプローチの可能性を示すことを目的としている。英語話者と日本語話者の認知のしかたの違いに気づき、その違いを意識しながら学習をすすめることによって、効率よい英文法習得が可能となることが期待できる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[認知言語学] [学校英文法] [英語教育]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

この研究では、高等学校での英語学習に入る直前、または直後の生徒を対象とした英文法参考書を制作し、中学校で学習した文法事項を認知的アプローチから捉えなおす方法を提示している。高等学校での英語学習を効率よく行うことができるように、英語の文の基本となる名詞と動詞に焦点を当て、英語の文の仕組みを理解することを目標としている。特に名詞については、現在の高等学校の英文法学習では中学校での既習事項として扱われており、学習の後半にまわされたり、まったく扱われないことすらある。冠詞や複数形の習得は、日本語話者が苦手とするものであるにもかかわらず、学校英文法での扱いは驚くほど小さい。また、現状の学校英文法では、「限定詞」という項目がないために、冠詞や代名詞などの使い方が正しく理解されていない場合が多い。このような状況を打開するために、この研究で提示する英文法参考書では、まず身の回りの物事を表す名詞の性質を理解し、その後、動詞の性質を理解することで、〈名詞+動詞〉という文の基本単位を作ることができるような構成としてある。さらに、従来の学校英文法でばらばらに扱われていた、名詞、冠詞、代名詞、形容詞、前置詞をまとめることで、物事をどのように英語で表せばよいのかという運用面での能力の向上も期待できる。

この研究では、プロトタイプを中心とするカテゴリーと、イメージスキーマに基づく放射状カテゴリーという観点から、英文法習得に有効な方法を検討している。認知言語学で扱うカテゴリーは、機械的な分類ではなく、人間が物事をどのようにとらえているかによって作られる、フuzzyな境界をもつものである。英語と日本語における物事の表し方の違いは、英語話者と日本語話者のカテゴリー化の違いであり、その違いが理解できなければ、英文法学習は表面的な知識だけで終わってしまう。また、英語話者のカテゴリーのしかたを理解していないと、自らがもっている日本語話者としてのカテゴリーのしかたを英語にあてはめることになってしまう。英語話者がどのように物事をとらえ、どのようにカテゴリー化しているのかを知ることで、英文法の基本を身につけることができるのである。

以下に、この研究の成果として制作した英文法参考書の内容について、名詞と動詞の二項目について概要を記すことにする。

・ 名詞の性質と物事の表し方

英語の名詞は可算名詞と不可算名詞という分類があり、そのような分類をしない日本語話者にとっては習得の難しい項目のひとつとなっている。そこで、この研究では、日本語話者が効率よく名詞の性質を理解できるようにするために、英語話者のものの見方を学習に取り入れることにした。英語話者にとって、可算名詞は、はっきりとした輪郭をもった形が意識される〈個体〉であり、不可算名詞は、はっきりとした輪郭をもたない〈連続体〉である。このようなカテゴリーに気づくことで、英語の名詞の性質を正しく理解することが可能となるはずである。学習の方法としては、可算名詞のプロトタイプとして、「車」「家」「鳥」を取り上げ、それらのイラストにはっきりとした輪郭を描くことで、〈個体〉としてのイメージを作り上げることができると考えている。

研究成果の概要 つづき

名詞の可算・不可算のとらえかたの次に問題になるのは、単数・複数、定・不定の表し方である。これまでの学校英文法では、品詞分類による文法学習が行われてきたために、冠詞、代名詞、形容詞がばらばらの項目となり、物事の表し方としてまとめて扱うことができなかった。この問題を解消するために、限定詞という見方を取り入れ、物事の表し方をまとめて学習することができるようにした。

また、名詞を中心とした表現のなかで、前置詞も扱うことにした。前置詞は学校英語教育においても早い時期に学習するものであるが、教科書で取り上げられる意味をばらばらに学習するために、適切な使い方ができないままになってしまっている。そこで、それぞれの前置詞の基本的な意味をイメージスキーマで表し、さまざまな意味は、そのスキーマからの意味拡張としてとらえることができるように提示のしかたを工夫してある。

・ 動詞の性質と動作と状態の表し方

〈個体〉と〈連続体〉という名詞の性質を表すカテゴリーは、動詞の性質にもあてはめることができる。名詞と動詞には共通する性質があり、名詞と動詞の平行性として指摘されている。この研究では、動作動詞を〈個体〉、状態動詞を〈連続体〉としてとらえ、それぞれのプロトタイプとしての動詞をイラストで表すことで、動詞の性質を理解することができるようにしてある。

また、他動詞・自動詞の分類については、「他動性」という視点を取り入れ、プロトタイプの他動詞文からの意味拡張として他動詞文をとらえられるようにしてある。

英語で文を作る場合には、時制と相を正しく選択しなければならない。日本語と英語の表現にずれがあることから、学習者にとっては混乱する文法事項であったが、時制と相の基本的なイメージをとらえることで、より正確な知識が身に付くことが期待できる。たとえば、動作動詞の現在形と現在進行形が表す意味を、〈個体〉〈連続体〉のカテゴリーを応用することでイラスト化し、視覚的なイメージとして把握することができるのである。

このように、英語話者の物事のとらえかたを知り、それらを視覚的にとらえイメージ化することで、機械的なドリル演習から脱却した新しい英文法学習スタイルを作り上げることができると確信している。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)